

四 堺利彦 明治三十二年～三十四年 —— 永島・杉田との交遊

さて、杉田の日記が明治三十一年九月二十八日で終つたのち、しばらくの間、杉田たちの動向を知るよすがとなる資料はない。年が明けると堺の『三十歳記』（明治三十二年一月～三十五年三月）が資料となる。堺自身もその自伝中で、この日記からのぬきがぎをもつて、この時期の回想に換えている。ここでは、堺が永島と杉田のことをまとめて抜き書きしているの、まずそこを引用してみる。

「昨日午後、永島を訪ひぬ、永島〔洲〕休日にて家に在り、囲碁、雑談、夜に入りて雨ふる、終に宿す」
 （二月二十九日夜）^{*1}

「天涯、病院の春雨を如何にか見たる、往きて訪はんと欲すれども機を得ず」（三月一日）^{*2}。「昨、杉田を（赤十字病院に）訪ふ、相変らずの容体也、我を引とめて話せよといふ。さまざま昔話等をするに、あはれなる事共多かり。……^{*3}」（三月廿四日）。^{*4}「……昨日、眠柳と我と蹴月を訪ひ、三人して天涯を訪ひぬ、此日天涯熱四十度、特に疲労の体也、嗚呼々々是も亦夏を過し得ざらんか」（四月廿八日）。「杉田此のごろ独り病室に在るに堪へず、是非誰にても居てくれよといふとぞ、……^{*5}小千代子能く杉田の為に病を見る、友人の交、杉田と永島の如きは稀也」（五月一日）。「黒岩よりの帰途、杉田を訪ふ、永島夫妻恰かも来あはせたり、杉田やうやく〔やうやう〕衰ふ、されど四人の閑談猶甚だ興あり」（六月十二日）。

次に、以上の自伝中の抜き書きが落とした部分を、注のようにして『三十歳記』から補つておく（なお右の引用中の〔 〕内は『三十歳記』による）。

*1 『三十歳記』には、この後二月十五日夜付で次の記載あり…「紫山終に中央に引留めらる、少々意気地なき仕方也、杉田甚だ怒れり、われ甚だ困れり。」

*2 この後、三月十日の項には、「過ぐる日、永島の家にて杉田の父なる人にあひぬ、久しく杉田を訪はず、おりおり思ひいづれど機を得ず。」とある。

*3 ここで省略されている部分の日記は次の通り…「今一度世に出でて少しづつなりとも仕事をする事出来るやうならばと思ひていろいろ心工面の事もあれど そは果たして何時なるべき 若し終に其時なき程ならば予は早く死にたしと杉田いふ也。」

*4 この間、四月廿六日朝付で次の記載あり…「夜永洲を訪ひぬ（昨日）、囲碁、雑談、いささかも不快を感ずることなきは永洲也、只此人にして今少し気あらしめば。／近日永洲夫妻あそびに来べしといふ。」

*5 省略部分は、日記では「嗚呼々々、是れ死の近きを示すものにあらずや」とある。

『三十歳記』としては、永島は明治三十二年一月二十九日に初登場、杉田は二月十五日から出てくる。この部分では、杉田がどういう状況で療養しているのか、判然としないが、その後の言及から、赤十字病院に入院していることがうかがえる。二月十五日の部分でも、紫山（堀成之、堺の自伝には、読売新聞の記者としてたびたび登場している）が何か勤務先といさかいがあつたが、結局最初の志を果たせず、「終に…：引き留められ」ということがあつたようで、堺も「少々意気地なき」対応ではないか、と紫山に批判的である。杉田はやはり志士風で、たいへん憤慨していた。しかし、紫山の妹を堺は妻にしており、そうあからさまに批判するわけにもいかないという心理が働き、「甚だ困れり」ということになったのだろう。ともあれ、杉田の病床にありながら、意気軒昂な様子が見られる。

引用するときどういう部分を落としているかに、親しい人たちへの配慮が見て取れる。紫山に批判的な言辞をはばかり、自伝には載せなかったのである。同様に四月二十六日付の永洲訪問の件も、「只此人にして今少し気あらしめば」という評を憚つて、自伝には引用しなかったのではないだろうか。永洲は心臓が悪かったと聞いている。病弱であることは、堺の自伝や日記からも、杉田の『鎌倉日誌』からも読みとれる。それもあって、若いころから活動的というよりは、人の面倒見がよく、おだやかに、柔らかに過ごしている感じである。¹⁴

さて、この後、堺は三月二十四日、四月二十八日、五月一日、六月十二日とほぼ毎月一回見舞った記事がでている。だんだん衰えていく様子を、堺は悲しみをもって見ている。「嗚呼々々是も亦夏を過し得ざらんか」「嗚呼々々、是れ死の近きを示すものにあらずや」と、杉田の死を予感し、胸のうちの予期悲嘆が表現されている。

杉田は独りになることを嫌って、そばにもつといてくれと言うという様子に、堺は二回言及している。先に『鎌倉日誌』から二回の咯血時の杉田の覚悟を見たが、そのことと独りになりたくないということとは別のことで、矛盾したことではないだろう。日誌でも、まだ衰えが進んでいない六月八日、鎌倉に着いた夜、付き添ってきた年峰を引き留めて、泊らせている。もともとそういう性質であったのが、衰えに伴って、強くでるようになったのであろう。孤独を嫌がり、人とのつながりを求める——杉田は自分に正直なのである。

死を予感し、平静な心でそれに向かう覚悟があることと、生きている今、人に傍にいて欲しいと、孤立を嫌がることとは両立することだということに、杉田という人のあり様を通して、私は気付いた。人は死を怖れるというが、その実質は孤独・孤立を怖れているのだと、別の考えるプロセスを通して私はこれまで語ってきた。この場合は、人が死を怖れるという事態から、その実質は何かと問い進んだのである。が、杉田において

は、死は怖れないが、死に向かう現在の生における孤独は怖れるという仕方だ、両者が区別されている。

「今一度世に出て少しづつなりとも仕事をする事の出来るやうならばと思ひていろいろ心工面の事もあれど、そは果たして何時なるべき。若し終に其時なき程ならば予は早く死にたしと杉田いふ也。」——この自伝には引用を控えた部分は、興味深い。堺はここではただ引用しているだけであるが、堺が別のところで語っていることからすると、杉田のこの考えには賛成していないのかもしれない。この点については本エッセイの終わりに考察する。

さて、このような交友は、堺がその頃までしていた長州史の編輯事業が六月の末を以つて終了し、萬朝報に入るといふ動きとも重なってくる。以下、少し長くなるが、自伝から関係部分を引用しておく。

……新聞社と云えば、報知新聞か萬朝報かであった。……後者にも色々の因縁があつた。先ず杉田天涯が（病氣ながら）その記者であつた。杉田および永島永洲君を経て、朝報社の元老たる小林天竜君とも知合になつてゐた。……堺としては、當時、特殊の色彩を發揮していた萬朝報が好きで、殊に杉田から色々内部の頼もしい話を聞かされていたので、出来るものならそこに入りたいという気が早くからあつた。福岡から帰つた當座、芝公園の宅の前で遊んでみると、赤羽橋の方から五、六人づれの洋服の一群が、何か盛んに談論しながら、サツサと大股に歩んで来た。フト見ると其の中に杉田がゐた。杉田は立ちどまつて堺と二こと三こと話して、すぐに、一群の跡を追うて走つて行つた。その時、杉田が堺に言つた、「あれは内村さんと、社の人達だ。」堺はそれを聞いて羨ましい気がした。杉田が内村さん其の他の一群に立ち

交って、あんなに談論しながら、あんなに足早に歩いて行く。自分は世の中に取残されたような気がした。そんなわけで早くから萬朝報に念がけていたので、いよいよ編輯所の仕事が片づく頃、報知よりもまずその方を頼んで見た。すると永島永洲君が小林天竜君に話して、わけもなく入社の手順を運ばせてくれた。

颯爽と談論しながら歩いていく萬朝報の人々と、特にやることもなく自宅のまえでぶらぶらしている自分を描き分け、「自分は世の中に取り残されたような気がした」と結ぶ。堺の心情がよく伝わってくるエピソードであり、描き方である。

さて、堺の日記を見ると、萬朝報入社を希望してから決まるまで、主観的には結構時間がかかったようだ。

我は萬朝に入らんの望みあり、久津見、幸徳の二人に相談中なり。(四月九日夜)

春雨蕭々たり、萬木芽を吹く、なんぞ心地よきや、……嗚呼、々々、我は一二年戸を閉ぢて讀書せんと欲すること頻也、昨夜幸徳と久津見とに書を送りて萬朝入社の相談を取消したり。(四月十二日)

萬朝入社の事略成らんとす、別に閉戸讀書の考案もあれど行はれがたかるべし。(四月二十日)

其夜、林田來る、我に報知社に來れと勧む、されど我いまだ決せず、萬朝の方もいまだ決せず。(五月一日)
萬朝入社の事永洲の周旋にて略と、のひたるが如し、閉居讀書の考案も終に實行せられず是も亦勢なるべし。(六月二日)

二三日前、永嶋と共に小林慶二郎を訪ひ萬朝入社の事確定す、小林頻りに呑込む、小林は蓋し小人なるべし、然れども今は朝報社の元勳として必要の仁なるべし、彼が呑込むに任せて何事も彼に任す、彼は自己の黨與を作るに汲々たり。

近日黒岩周六に面せんとす、いまだ何日より出社すべしとも定まらず。……

我が萬朝に入らんかと思ひそめしは久しき前の事也、福岡より帰り來し時も杉田にその意を漏らしたる事あり、……（六月十日）

この後、六月十二日に黒岩を訪ねた時の日記は、自伝にも引用されている。

今朝、黒岩周六を訪ふ、洋館の応接間甚だ美なり、黒岩は一癖あるべき面魂の男なり、されど談話は頗る鄭重に頗る明晰にして不快を感じせず（自伝では「感ぜしめず」、新聞の俗務なるを説き、其俗務を厭ふこと勿らんを我に望み、追々我に適する職務を選ぶべきにより氣を永くして其時を待たれよと云へり。

自伝に戻つてこの後の様子について引用を続ける。

斯くて堺は七月一日から朝報社に出勤した。金はあるし、新しい地位は得たし、彼の得意想ふべし。しかし一面には、妻の病気が肺尖カタルらしいと云うので、せめて夏中、転地療養する事となり、永島夫人千代子、その長女文ちゃんと同行し、妹の保子と不二彦とを連れて、七月八日、塩原の温泉に赴いた。その時の日記。「我は直ちに家を片づけ、荷物を加藤にあづけ、午後永島の家に引越す、當分永島の家に居候なり。」

右の引用（明治三十二年七月）が、『堺利彦伝』の記録の最後の部分であつて、この後は全体を振り返つてのま

とめとなっている。

堺は母、父、兄と次々と亡くし、今また妻美知が肺炎カタラしいという心配な状況である。息子の不二彦も思わしくない。それを永島夫妻がサポートしている。妻小千代は長女を連れ（文字も「兎角病身にて」と七月五日付の日記にある）、堺の妻子と一緒に塩原に転地療養に行き、そして堺自身は東京に残る永洲の家に居候となるのである。

この後の経過については『三十歳記』に依って、杉田との交流を追ってみる。

今朝杉田を訪ふ、熱高くして苦悶せり、瘦せたることよ、決して永からざるべし、我が贈りたる金にてカバンを買へり、何にするかと可笑しけれど、幾許か此病友の心を慰めたるは嬉しき也。（明治三十二年七月十四日付）

一昨日、杉田を訪ふ意気昂然例の如し、彼の病も奇なる哉。（十月二十九日付）

引用中の「我が贈りたる金」については、七月五日付日記によると、堺は毛利家修史編輯事業が終わって、「慰勞として金千圓」を得ており、そこから、借金を返し、質を返しとしている中で、「杉田へ見舞 十圓」とある。その金で杉田はカバンを買った。この杉田の行動と「決して永からざるべし」という判断との対照がある。死が近いのになんで今更そんなものを買うんだらうと訝しんでいる。しかし、そのような活動をして、喜んで杉田を見て、よかったと思つてもいい。

「意気昂然例の如し」——衰えても、杉田の意気は衰えなかった。訪れる度、いつものような意気で、社会

を批判し、人の行動を喜んだり、怒ったりしていたのであろう。堺はその意気軒昂たる杉田を半ばほつとし、半ば心配しながら見ていた様子がうかがえる記述である。

以上が、生前の杉田との交友への言及の最後で、次の言及は、すでに墓碑の記述を確かめるために引用した、杉田の死と葬式についてである（十二月二日付）。

この後、杉田への言及は、当然と言えば当然だが、なくなる。しかし、忘れてはいない。一つは既に引用した、明治三十四年十二月十七日付の、杉田の墓の石刷りについての辛口の論評である。もう一つはそれよりほぼ一年前、杉田の死から一年一ヶ月ほどたった頃のものである。

我が友、落葉社の人々とは疎くなれり、永島と加藤とのみ今も変わらず交はれり、其他は何故にや我れよりもあまり近づかず彼れよりも来らず、……

……友といえは杉田在らばといつも思ふなり、されどこれはせんなし……（明治三十四年一月廿四日付）

落葉社の活動の中核にいたしたのは、堺ではなく、杉田であったのかもしれない。『鎌倉日誌』が語る、書簡による句会も、療養中の無聊を慰めるためではあつたろうが、杉田が主宰していた。その杉田がいなくなると、落葉社の交友は自然に消滅していったということではなかつたか。¹⁵

五 堺利彦 明治三十二年～三十五年 —— 妻美知と子不二彦

これまで、親友杉田の病と死にかかわっている堺の様子を抜き出してみたが、堺にとつては、もつと身近に氣遣われる人たちがいた。妻と子である。まずは自伝中で『三十歳記』から引用しているところを孫引きしておく。

美知と不二。「不二彦四五日来病氣にて困る、少し食はせすぎて腸を傷けたる也、元来丈夫な児にあらざ、色白くして我が子に似ず、頭の形も甚だ奇也、行末氣遣はしき事也」(二月十五日)。「不二彦よく歩む、靴をはきて或ははだしにて歩む、……此頃牛乳も飲む、めしも多く食ふ、ランプ、マツチなど言葉も二つ三つ言ふ」(四月二十日)。「不二今日はじめて単衣の浴衣を着たり、追々いたづら盛なり、皿茶碗などはさぬ日なし、言葉はトント出来ず」(六月六日)。「美知胃腸を損じたること甚だし、今日医者に往かしむ、不二も下痢す、母の病によるか、願はくば母子健康なれ、妻病み子泣かば……」(四月十二日)。「美知頗る衰ふ、胃腸の病なりといふ、断然たる養生も為し得ず、猶不二に乳を飲ましむ、かくて長く此燼に過す可らず、……不二も亦甚だ強からず、関心之に過ぎたるはなし」(四月廿八日)。「美知今日又胃痛にて寝て居り、困りもの也、到底、姑息の治療にては全快せざらんか……」(六月十四日)。「美知の病、如何にかなるらん、夫妻、親子、家を成すは苦か楽か、永島と共に之を疑ふ。……」(七月五日)。

この間、長子不二彦の病についての記述が多い。思わしくないのである。

昨、不二彦脳膜炎を発す、一兩日前より熱ありしが……。社に知らせ来る、驚きて帰宅す、家内皆々大騒ぎ也、ひきつける時は今にも死にさうにて見るに忍びざる心地す、……（八月二十八日）

未だ今後の病勢を判すること能はず、永島の榮坊も是にて斃れし也、頭の形も相似たるより思へば氣遣はるること一入也。（同日付）

不二、痙攣なき時は只昏々として眠る、他の病の如く苦悶するを見ず、それが為め素人には却つて危篤を感じず、然れども、彼のいたづら者が、今は只平臥して語らず笑はず動かざるを思へば、親の心は断絶せんとする也、嗚呼終に子を失うの感を経験せんとするか、今日永洲に会ひしに永洲特に同情を寄せたり、榮坊の事あれば也（八月二十八日）

子の死を予感する親心がひしひしと伝わってくる。こういう時にも気持ちを見せてくれる友永島が登場するかつそこでは、同じ病で子を喪つた者だからだという思いが表現されている。このような辛い思いをしているのは自分だけではない、親友永島夫妻も味わたのだという理解が、慰めとなつている。永島夫妻もまた長男を同様に亡くしていたのであった（私の父には兄がおり、雄二郎という名前であった。¹⁶ その由来について私は今回始めて、そうか「榮なにがし」という長男がいて、この頃すでに死亡していたのだと気付いた）。

これからさらに不二彦の危篤状態は続くが、なんとか病院まで運んで入院させる（八月三十日）。

入院は實に實に喜ばしき也、入院させて寄り我は重荷をおろしたる心地せり、此不便なる土地にて譯も分らぬ醫者にかけて我子を殺すことあらば、我は親たるの義務を尽さざる心地ぞすべき、病院にて死せば又あきらむる方もあるべし。（九月二日）

・不二彦いよいよ望なしといふ、一昨夜より病勢さらに一段を進めたるなり、……

・我今はさまでに悲しくもなし、何故に今少し悲しからざるかと思ふほどなり、胸せまり涙こぼるゝなどの事なし、眼前苦悶するを見ざればなるべし、且は、希望なしといふ事、(回復の見込みなしとの事)漸次緩慢に來りたればなるべし、只、今後、折にふれて思出づること多かるべし。(九月四日)

しかし、やがて不二彦の病状がやや上向きになる。九月六日、十日、十一日、十三日と、「不二やゝ善し」という言葉が見られる。とはいえ、どうなるか、不安は消えない。

或いは回復するやも知れず、只、回復後、不具たらざる無きを得んや、それも手足多少の不具は忍ぶべし、若し精神的に不具とならば、我等夫妻及び當人不二彦生涯の悲惨事なるべし、噫。(九月十日)

ややよくなったとはいえ、その後、回復は遅々として進まないまま、日がたち、

不二、回復いつの事やら知れず、到底費用つゞかざるを以て退院せしめんと欲す、雨ふりて果さず。(十月六日)

ということになる。資金が尽きそうになってきたのである。十月八日に「今日こそ不二を連れ帰らんと欲す」とあり、十月十一日に「不二は家に帰りたり」とあるので、十一日ころ退院したということであろう。この後も衰弱しているのではあるが、生き続ける。が、やがて、杉田の死の記述が十二月二日付であつて、続けて、

不二彦、いよいよ衰弱す、昨日醫士来りて言ふ、今度こそいよいよ危篤也、一兩日を支ふるに過ぎじと
……
と。その後、日記は、十二月九日、二十日の日付の記録があつて、

午前九時十分不二彦終に死す……（十二月二十二日付）

堺は親友の死と息子不二彦の死を、ほとんど続けて看取つたのである。

他方、この頃は妻美知については、基本的に楽観的な記述になっている。杉田や不二彦に比べれば、まだそれほど衰弱していなかつたのであろう。

我が今の気持ちにては、何となく美知の病氣は間もなく癒ゆべしと思はる、さる道理ありと信ずるにはあらず、只何となく然思はる、願はくば眞に然あれかし、若し更に重症に陥ることあらば、我が前途は果して如何なるべき。（七月十四日）

これは、先に引用した、杉田が堺からの金でカバンを買つたという件で、杉田について「決して永からざるべし」と記した数行後に書かれたものである。楽観的というよりは、堺の願望というべきであろうか。快復しなくては困る、もつと悪くなつたら、自分はどうなるんだ、という不安を、「もうすぐ癒えるさ」と思

うことによつて打消し、自分を支えているのである。希望的観測というものは、こういうものではないだろうか。よいと見える兆候は採用し、暗い行方の兆候は度外視して、よいだろうと思う。ただ、堺はそういう自分のあり様を自覚して「道理」に基づいてそう思っているのではなく、「只何となく然思はる」としている。そうでなかつたら自分の人生の前途は真つ暗だ、だからそうならないで欲しい——子の死を覚悟し、親友の死を予感する中で、妻だけはなんとか自分の傍に残つて欲しいという、切なる願望の表白がここにある。

さて、少し話を飛ばして、二年ほどたった明治三十四年五月二十日付の日記を見ることにする。この頃、妻美知は鎌倉で療養している。肺炎カタルという病名が告げられている。他方で、社会民主党についての言及もみられる。

・片山潜、木下尚江、河上清、幸徳傳二郎等が社会民主党といふを組織した、予も入黨する筈であつたが、今日内務大臣から結社を禁止せられた。

いよいよ、社会主義者堺利彦への道を歩みはじめつつある。その堺は、他方で美知のことを心配している。美知について長く書いているところから抜粋して引用する。

……誰しも自分の事は、或時には都合のわるいやうに考へなして心配する代りに又或時は成るべく都合のよいやうに考へなして仮に心を慰めるものであるから、美知の事についても、まだ肺病ではあるまいと今まで思つてゐた。

然し予は三年來その事ばかり氣遣つてゐた、美知が咳するのを見て、今にも血を吐くか吐くかと思つてヒヤヒヤとしたのは毎日の事であつた、多分世間の人は、もう疾うから、堺の細君は肺病だと、斯うきめてゐたに違ひない、肺炎かたるは肺病ではないと言ふけれど、誰でも初は肺炎かたる肺炎かたると云つてゐる中に、何時しかチャンと本物になるのがお極りであるから、ミチの場合も其の通りと覚悟せねばならぬ、然し何となく直りさうな気持ちもする、ここが慾目といふものだらう、昨日直に手紙をやつてミチを励ましておいた、……、今は只安心と希望とを彼に與へる事が必要である。

秀子も肺病で死んだ、欠伸居士も肺病で死んだ、ミチも肺病で死ぬるか知らん、死ぬるなら死んでしまへ、おれは此の世の中に独りになるのだ。

両親が死んだのは仕方がないが、兄が二人死ぬる、スカートハートが死ぬる、子が死ぬる、親友も少なからず死ぬる、そうして終に女房も死にさうになつてゐる、此の次には自分が死ぬるまでの事だ。……

親しい者を次々と亡くし（秀子という恋人はたしかここが初登場である。これについては本稿では詮索しない）、今や、妻も死を免れないかもしれないと、怖れている。「皆死ぬなら死んでしまえ、そして、自分は孤独になるんだ……」と言つてみる、書いてみる。親しい者がみな逝つてしまい、自分は孤独になるということ、それが堺の怖れの核心にあると言えよう。だが、再度、同様のことばを繰り返して、最後に「皆死んでしまい、最後に妻もまた死にそうだ、そうだつていいじゃないか、次は自分が死ぬんだから」……自分は独りぼつちになつてしまふ、が怖れの表現、自棄の表現だとすると、自分だつて早晚死ぬんだと、先のことを把握するのは、自棄というよりは、物語りがそのようにして終わり、もはや、悲しみも辛さもなくなつてしまふ、ある意味で安定した状態を予感していると言えるのではないだろうか。ここから堺は目下のことに目を向ける。

これから先、ミチの病中、二年か三年か五年か知らぬけれど、予は全くミチを養ふために働かうと思ふ、予の功名心は其の跡で満足させればよい、予が国家社会のために働くべき事があるならば、やはり其の跡で働けばよい、病みたる女房のある間は、其の療養と看護とのために予の全力を費して少しも残念でない、

……

この記述に先立って、社会民主党の成立と、自分も入党するはずだったということを書いているからには、ここで「予が国家社会のために働くべき事」とは、このような動きを念頭においてのことであろう。それと妻の病への配慮とを天秤にかけて、後者を選んでいる。妻を介護するために自分は生きるのだと、決心を語っている。

この後も、堺の日記にはたびたび美知が登場する。鎌倉あたりで療養しながら、主に手紙でやりとりしているのである。このあたりの経過は飛ばして、翌三十五年三月二十五日の日記に注目しよう。

六 堺利彦 明治三十五年 —— 肺病をどう生きるか

この頃、美知の鎌倉引揚げが話題になっていた。堺としては、主に経済上の理由で、鎌倉で過ごさせるわけにはいかななくなっている。しかし、医師をはじめとして、周囲の者には反対の意向もある。永島は堺に感染することを心配している。しかし、反対の主たる理由はそれとは別にあつたようだ。

……又、同居の結果が、本人の病勢を進めると云ふ説もあるが、それは我々の慎み次第の事、又よし多少病勢を進めるとしても、それは仕方はないと思ふ、一時の病氣、回復する病氣ならば兎も角、永久の病氣であつて見れば、多少病勢を進めるからとて、全く夫婦の交りを断つ事は出来ない、又強いて情に反する事が必ずしも健康に善いかどうか分らぬ、総ての点に於て余り不満足な生活をして少しばかり長く生きるよりは、少しくらゐ短くても稍満足に暮す方が人生の本意であるかも知れぬ、医者之眼から見れば、只少しでも永く生きさせるのが本意であらうが、人間は生理的ばかりに生きて居る者ではないから、少しは医者以上の考へも必要である……

現在の医療状況とあまり変わらない考えが提示されている。延命第一か、それとも人生の中身が大事で、それを豊かにすることが優先か、という選択肢を挙げて、医師は前者に傾くけれど、堺は後者をとつており、その結果延命第一に生きるより短命になつても仕方ないではないかという立場をとつている。そのことを「夫婦の交り」という題材をとつて主張している。現代の医療をめぐる問題状況とさほど変わらないところが興味深い。いのちの長さばかり気にするのではなく、中身つまりQOLを優先しようという立場を、堺は主張しているのである（このことを話題にした席で、「奥さんはどう考えているのかしらね」と疑問を投げかけられた。夫婦の交りという題材である以上、現代的には、堺が独りでこう主張するだけでなく、妻はどう考えているのかも配慮しなければならないのだが、堺の書きっぷりにはそういう配慮は感じられない。時代の制約というべきであろう）。

もう一つ、患者の生き方についての堺の持論がここに出てくる。

又一つ予の考へがある、肺病のような緩慢な病気に罹つた人は（急性のは別として）自分も病人らしくせず、成るべく平常の事務に服させるが善い、勿論病氣の為に事務の種類と執務の場所とを改める必要はあらうが、兎に角、何年も何年も遊んで保養をすると云ふよりは、保養しながら働いて行くが善い、遊んで居るのは死を待つような者である、生きて居る間は働くからこそ生きて居る甲斐がある……

この考えは、明治三十五年七月、萬朝報紙上に「肺病に罹りたる友人に與ふる書」（上）（下）（下は七月三日付）として掲載した評論の基本的考えである。そこに登場する「友人」は結核発症より二年ほど、湘南各地で転地療養をしたが病がよくならないで、煩悶しており、「予の餘命幾許もなし、前途絶望なり、故に何事も試むるの意なし」と書いてきたという設定になっている。死期が近づいてきているので、もう何もする気にならないというわけである。これに対して、堺は、こういう発言をするとは何事かと諫める。「短命ならば命のある間だけ人の為に盡すべし」という。もし、前途が短いから何もする気にならないのなら、高齢者は皆何もできないことになつてしまふではないか。しかし、その多くはそれなりの事をしていらず、ということである。

さらに堺は急性期の治る病氣と、慢性的に進んで治癒困難な病氣を区別する。

人の暫く事業を廃して病を養ふ事あるは、是れ回復の後大いに事業を為さんと欲するに依るなり。病若し長く癒えがたしとせば、病間を以て何等かの事業を為さざるべからず。事業なき生存は無意味なり。單に生存の為にする療養は無意味なり、無意味の療養を為し、無意味の生存を為すが故に、慰藉なくして煩悶あり。

療養して治るような場合、しばらく事業を休んで、回復してから事業をするということが出来る。しかし長く病が続いて治療が困難であるような場合、健康であつた時の事業を続けるということではなく、現在の自分の状態のできる「事業」をしながら療養せよというのである。家人を教える、鶏を飼う、花を植えるといったことも事業なのである。そのような活動をしてこそ、生きていくことに意味があり、ひいては療養にも意味があることになり、煩悶しないで済む、という。転地療養が、ただ海浜地域でぶらぶらと保養するというものになつていゝのではだめだということになる。この考えの線上に、先に引用した正岡子規に対する堺の賞賛のこゝとばがある。子規は堺からみれば、堺のこの考えを「文学の為に盡す」という事業によつて実践している模範なのである。

妻美知について、その身にあつた働きをしながら保養すると日記で勧めていた。また、長く続く治らない病気の場合、禁欲的な生活をして、不満足ながら少しばかり長く生きるよりは、満足いく生活をして、そのためにのちが短くなつてもいいではないかと言つていたことともこれは通じるところがある。要するに、ただ生きるということが問題でなく、事業といつたり、満足といつたりしているけれど、結局、内容のある豊かな人生を送るよう心掛けるということになるだろう。

では、先に問題として残しておいた、杉田の考えはどうなるのだろうか——「今一度世に出でて少しづつなりとも仕事をする事の出来るやうならばと思ひていろいろ心工面の事もあれど、そは果たして何時なるべき若し終に其時なき程ならば予は早く死にたし」。杉田には出来るやうならあれをやろう、これをやろうと「心

「面」している。しかし、それらは今の杉田にできる「事業」ではないようだ。だから、それができるようになることはないかもしれない（「終に其時なき程ならば」）。もしそれができないとするなら、早く死んだほうがましだ、と言っていることになる。明治三十五年の堺であれば、おそらく「あれまたはこれができるようになつたらやりたい」ではなく、今できることを見つけて、今やるのが肝要だ、と心えるであろう。堺に言わせれば、杉田は回復可能な急性の病への対処をしていることになる。だが、「肺病」は慢性に進む、回復困難な疾患である。そうであれば、今できることを今しながら、療養を続けるべき、なのであろう。

とはいえ、堺は杉田のこの言葉一つを捉えて、批判しようとはしていないと思われる。むしろ、杉田が病床で、杉田にできる「事業」をやっていたと見ているのである。皆に愛され、周囲によい影響を与え、社会のことに関心を持ち続けるという仕方、「志士型」の人物として「事業」をし続けたのである。

「ああ天涯、彼は実に人情に厚い涙もろい、美しい心持の青年であつた」——大正十四年頃執筆した自伝中にそのように追憶した時、堺の脳裏には、最期まで自分らしく生きぬいた、つまり自分にできる事業をそれなりにやり続けた天涯杉田藤太の姿が鮮明に浮かんでいたに違いない。

■ 註

- 1 本稿のテーマとの関連性は薄いですが、手元にある封書（いずれも永島永洲宛て）について若干の説明を加えておく。まず、坪内逍遙の書簡（図9）は、早稲田出の人物を新聞記者にと推薦するものである。次に、島崎藤村の書簡（図10）は、時事新報への連載についての連絡で、第一話「船」の送付期日などが記されている。その他、坪井正五郎（帝国大学理科大学教授、日本の人類学の草分け）からの、外遊が決まったため寄稿ができなくなったとの書簡などがある。

2 ここでは「壽歳」と表示したが、「壽」の下部の「二」と「時」はよいが、上部は「善」から「口」を除き、「羊」の部分を「丰」にした形である。また「歳」は、冠が「止」ではなく「山」であり、中は「示」である。

3 道坂昭廣『南摩綱紀』追遠日録（一名下野紀行）『訳注（上）』（四天王寺大学紀要 第四七号四三一〜四四七頁（二〇〇九年三月））には、幕末会津藩の漢学者、南摩綱紀（なんまつなのり）が、明治十七年に藤岡に立ち寄り、森鷗村と歓談した様子が描かれている。また、片山潜（安政六（一八五九）〜昭和八年（一九三三））は、岡山から東京に出てきた後、明治十六年晩夏から一年弱の間、森鷗村の塾に寄寓した。その時の様子が『自伝』に記されている（『日本人の自伝』8 平凡社、一九八一年底本は昭和六年改正文庫『自伝』。明治十六〜十七年といえ、杉田は十二、三歳頃であり、鷗村の家塾に入ったと思われる時期の二、三年前である。その頃の好ましい環境が、これらの言及からうかがわれる。

4 『鎌倉日誌』は私の手元にある原本を参照しているので、できるだけ原本の状態を読者に伝えるため、「行換えを」でしめしてある。また、漢字は旧字体を含め、原本にできるだけ近いものを選んだ。ただ、変体仮名については、フォントがないため、現行の平仮名で済ませている（「な」など）。

5 ドイツ語で「万国のプロレタリアよ、団結せよ！ カール・マルクス」と『共產党宣言』の有名な句が書かれてある。堺利彦らしい色紙である。もちろん本稿が扱っている時期より相当後のものである。やはり堺から、永島今四郎ないしは小千代に贈られたものであろう。

私事であるが、この色紙は私がまだ中学生の頃だったと思うが、私に譲られ

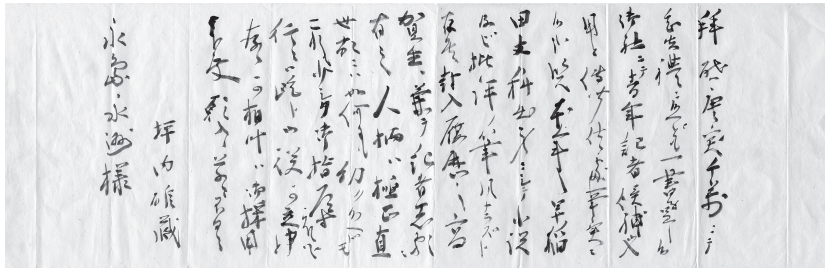


図9 坪内逍遙書簡

た。ドイツ語を読むことができるようになり、「ほうー」と思っと思わず微笑んだ覚えがある。

- 6 堺利彦全集全六巻 中央公論社昭和八年刊行。荒畑寒村編であり、堺の死の直後から八年後半にかけて刊行されている。奥付には「非賣品」とある。これも家に元からあったので、堺の継妻から永島小千代に渡ったものであろう。

- 7 堺利彦伝の前置きには、大正十五年六月二十日、日本共産党事件のため入獄する当日の日付で、大正十四年に雑誌『改造』に連載したものに、多少手を加えてここにまとめたとある（全集第六巻四頁）。

- 8 堺利彦全集第一巻七十六頁。

- 9 これについては次の文献がある…朝野新聞編塩見鮮一郎解説『江戸の下層社会』（明石書店一九九三年）

- 10 三田商業研究會編纂『慶應義塾出身者名流列伝』（實業之世界社明治四十二年刊）永島今四郎の項（四三二～二頁）は、永島を「時事新報社説記者」として紹介しており、次のような評を記している。「氏の嘗て『新朝野』に在つて筆を執るや、尾崎紅葉氏其文章を見て嘆賞して曰く、民間亦た斯の妙文を草するものある乎と、蓋し氏の文は洗練精緻雅麗にして華辱ならず、宛も幽水花を浮べて春峽を行くの趣あり。洵に東都新聞記者中に在つて得易からざるの筆也。」また、人をよく世話する人だったようで、そうわかると、坪内逍遙の推薦書が何通かの推薦状に交じつて残っているのも納得がいく（図9）。

- 11 「国際児童文学館紀要」第九号（大阪国際児童文学館一九九四年）所収。次のURLに公表されている。 http://nob.internet.ne.jp/note/note_11.html

- 12 「となく」は平仮名（「な」は変体仮名）。以下、いちいち断らないが、しばらくの間、片仮名の中に、少数である

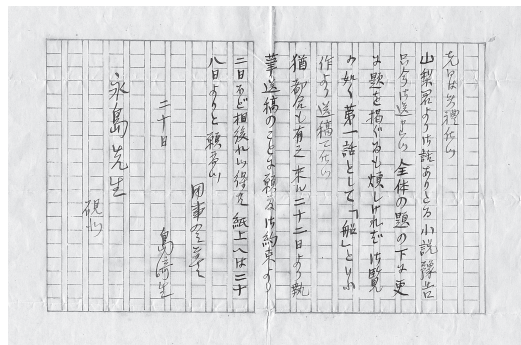


図10 島崎藤村書簡

が、平仮名が交じる。

13 『鎌倉日誌』を読み進むと、「牛山」とは、「牛山才治郎」として登場する人物と同一である蓋然性が高い（杉田はこの名を自分の知人の名をリストアップする件で挙げているが、永島と共に日誌に頻繁に出てくる牛山をここで挙げないのはおかしいので、ここでいう牛山才治郎であろう。ところで小千代については、諏訪の牛山（地名か苗字かはわからない）の出であり、永島は親友の妹を妻にしたと聞いている。さて、牛山才治郎という名の人物について、ウエブを検索すると、牛山才治郎『日本の製絲業』（有隣堂明治二十六年）というものが見つかる。これは諏訪周辺の製糸業について調べたものであり、奥付を見ると、著者牛山については「長野県信濃諏訪郡長地村……」とある。『千代田の大奥』で知られる永島の友人であつておかしくない。本論はエッセイであつて、学術論文ではないので、この程度の蓋然性をもって足れりとしておく。

14 前述の『慶應義塾出身名流列傳』においても、「氏資性温順にして信義に厚く常に謙讓を守りて人と争わず、虚飾を嫌いて質實を尚ぶ。……氏は斯の如き性格なるを以て、人の世話をすることを好み、……而して氏は病身なるを以て外遊を為さず、専ら家に在りて書畫を楽しみ花卉を愛して悠悠自適するものごとしと云ふ」とある。堺が「今少し氣有らしめば」と言いたくなる気持ちもわかる。

15 愛媛大学図書館蔵鈴木鹿文庫のリストに、杉田藤太編『狂詩戦』明治二十九年というものがある。これはおそらく明治二十九年五月に第一号が出ている同題名の雑誌のことであると思われる。編者とされる杉田が本エッセイの杉田だとすると、『鎌倉日誌』では句会を合戦に例えてもおり（諸同人に向つて書戦を挑む……一番善く心戦したのは、永洲と枯川」とあつた）、杉田の落葉社における位置を考える手掛かりになるかもしれない。

16 「雄二郎」という字は私の記憶によるので、誤っているかもしれない。

（しみず・てつろう 東京大学大学院人文社会科学系研究科特任教授）